

原発電源地域における都市景観の解明

岩手大学工学部 正会員 安藤 昭
 岩手大学工学部 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学工学部 学生員 浅沼 秀一

1. はじめに

福島県中通り地方は「原発銀座」と呼ばれるところであるが、富岡町はそのほぼ中央部に位置し、人口1万6千人の町である。富岡町は東に太平洋、西に阿武隈山系の山々といった自然環境にめぐまれ、社寺や遺跡などの歴史性のある場所も多く見られ、一方で文化・スポーツなどの複数の施設を有している。しかしながらその背景には原子力発電所の誘致に伴う急激な街づくりがあったのではないかと考えらる。

そこで本研究では、この富岡町をケーススタディとして取りあげ都市景観という面からアプローチすることにより、原発電源地域における快適な街づくりについて考えようとするものである。

2. 研究の目的

都市景観の育成に際しては住民の心安まる街にしていくことが大切であるという前提のもとに、日頃住民の接している景観の中から抽出した写真を住民に提示することにより、住民の目から見た現状を把握し、今後、原発電源地域における街づくりを始めていく上での現実の問題点を抽出し、それにどう対処し、方向付けていくかを考えていくことである。

3. 調査対象及び調査、解析方法

調査対象は富岡町全域で、用いた写真はイメージ調査の結果から抽出した場所、我々の独自に選定した場所の都市景観及び

都市近郊景観の写真93枚である。被験者は富岡町内に在住する18歳以上の男女で表-1に示す通り204人の回答を得た。

調査方法は面接調査法により行い、被験者に上述の写真を見てもらっている景観に分類してもらう。次に、写真1枚ずつについて5段階評価（非常に好き～非常に嫌い）を行ってもらう。その結果から住民の見る現状での景観の類型化・評価をそれぞれクラスター分析及び情報理論、系列カテゴリ法を用いて解析する。この結果を都市イメージ評価分析モデルにもとづいて

表-1 被験者の個人属性

性 別	男	98
	女	106
計		204
在住年数	20年未満	98
	20年以上	106

表-2 調査解析結果

景 観 パ タ ー ン			記号	枚数	選 点 場	対 象 景	評価値	評価順位
街 路	河 川	A	6	河 岸・橋 梁・道 路	河 流 及 び 河 川		0.6126	4
	人 造 建 物	B	4	建 物	人 造 建 物		0.8415	2
	海 岸	C	6	護 岸・丘 陵 地	港 湾・厚 岸・護 岸		0.5446	5
	田 圃	D	6	道 路・丘 陵 地	田 圃		0.1429	10
	近 隣 公 園	E	2	公 園 内	公 園		0.8454	1
	主要幹線・幹線・区画道路（1）	F1	9	街 路	商 店 街		-0.1700	13
	主要幹線・幹線・区画道路（2）	F2	3	街 路	連続住宅・中層住宅		-0.5255	15
	主要幹線・幹線・区画道路（3）	F3	10	街 路	住 宅 街		0.2943	7
	水 路	G	2	橋 梁・街 路	住宅・水路及び住宅地沿道		-0.3964	14
	橋 梁	H	3	橋 梁 周 辺	橋 梁		-0.0727	12
建 物	商業施設	I	2	街 路	ショッピングセンター		0.2175	9
	官公庁・厚生施設・学校	J	21	街路・校庭及び周辺	官公庁・厚生施設・学校		0.1097	11
	駅 舎 景 観	K	2	駅 街 広 場	駅 舎		0.2004	9
	社 寺 景 観	L	8	社 寺 周 辺	社 寺 建 築 物		0.7867	3
	パーソナル景観	P	9				0.3118	6

表-3 計画のための解析

区分	景観パターン	記号	枚数	選 点 場	対 象 景	評価値	評価順位
河 川	河 流	A1	2	道 路	護 岸	1.3148	1
	河 川	A1	4	河 岸・橋 梁	河 川	0.3008	8
	人 造 建 物	B	4	建 物	人 造 建 物	0.8415	4
海 岸	護 岸	C	6	護 岸・丘 陵 地	港 湾・厚 岸・護 岸	0.5446	5
	田 圃	D	6	道 路・丘 陵 地	田 圃	0.1429	10
	近 隣 公 園	E	2	公 園 内	公 園	0.8454	3
街 路	幹 道	M	2	街 路	幹 道	1.0729	2
	主要幹線・幹線・区画道路 (1)	F1	9	街 路	商店 街	-0.1700	16
	主要幹線・幹線・区画道路 (2)	F2	3	街 路	連続住宅・中層住宅	-0.5255	18
水 路	主要幹線・幹線・区画道路 (3)	F3	8	街 路	住 宅 街	0.2943	13
	水 路	G	2	橋 梁・街 路	住宅・水路及び住宅地沿道	-0.3964	14
	橋 梁	H	3	橋 梁 周 辺	橋 梁	-0.0727	12
商業施設	商業施設	I	2	街 路	ショッピングセンター	0.2175	9
	官公庁・厚生施設	J1	14	街 路	官公庁・厚生施設	0.0539	14
歴史的景観	学 校 景 観	J2	7	校 庭 及 び 周 辺	学 校	0.2168	10
	駅 舎 景 観	K	2	駅 街 広 場	駅 舎	0.2004	11
	社 寺 景 観	L	8	社 寺 周 辺	社 寺 建 築 物	0.7867	5
	パーソナル景観	P	9	—	—	0.3118	7

分析し、このモデルによる分析結果と前述の調査結果の相違点を追求することにより計画の手がかりを得ようとするものである。

4. 解析結果

(1) 調査解析結果

平均分類数は13であったが、パターンの意味づけを考え14分類とし、類型化されたが、写真をも1分類と考えパーソナル景観として加え15分類とした(表-2)。景観パターンを見ると、河川として溪流と河川が1つの分類、官公庁・厚生施設と学校が1つの分類となっている。これに対し、商業施設は商店街とは別に1つに独立している。駅舎、公園も独自の性格を持つものとして独立している。景観評価では図-1に示すように公園、人造湖、河川、社寺および自然環境、歴史的環境としての生活に潤いを与えてくれる場所の評価が高い。逆に街路や水路、橋梁など主として機能的な性格を持つ場所は評価が低くなっている。注目すべき点としては田園の評価が低い事であるが、これは田園景観中の高圧線や鉄塔の影響ではないかと考えられる。駅舎景観では古い駅舎の方が評価が高く現れたことも注目される。

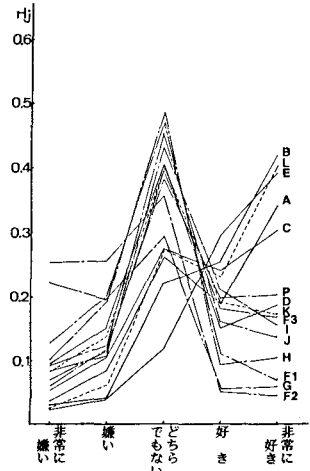


図-1 景観の嗜好評価値(調査解析結果)

(2) 計画のための解析

これらの調査結果のパターンをさらに詳細に分析し、溪流と河川をそれぞれ独立させ、官公庁・厚生施設から学校を独立させ、街路に含まれていた緑道も1分類として扱うものとした。このときの景観評価は表-3、図-2に示す通りであり、溪流の評価が高く、溪流を除いた河川の評価はそれほど高いとはいえないということが明らかになった。住宅街でも同様に、緑道を除いた住宅街は低い評価となった。官公庁・厚生施設と学校では学校の方が評価は高くなっている。

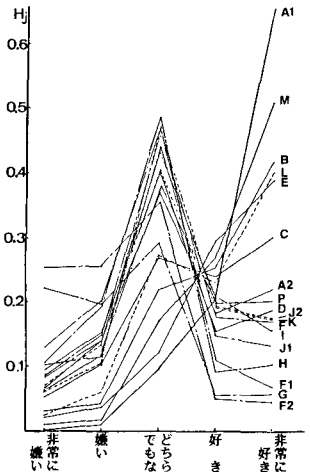


図-2 景観の嗜好評価値(計画のための解析)

ここでは分類数は18分類となる。これを前述のモデルにあてはめ、緑空間、機能空間、歴史的景観、パーソナル景観の4つのタイプに大別し示すと表-3のように示される。

5. 整備方針

以上の結果を踏まえ、快適な街づくりのための整備方針について要約すると表-4を得る。

表-4 整備方針

- ・近隣公園と緑道のイメージを一体化し、ショッピングセンターと商店街のイメージを一体化することにより、新しい内容のもとに14の景観パターンへ導く。
- ・商店街は、店舗を導入する事により活性化を図り、楽しく、落ち着いて買物が出来るよう、ショッピングモールとして整備していくものとする。
- ・連続住宅、中層住宅の建設は極力避けるものとし、一戸建住宅の建設を進める。
- ・住宅地付帯空間は、出来るだけ控え目にデザインし、庶民的景観の醸成を見つめる姿勢で望むものとする。
- ・水路は、下水道を整備する事により河川を浄化し、過剰な防護フェンスは控え、可能な限り自然河川化する。
- ・橋梁は、周辺地域との関わりを配慮し、デザインに表現する。
- ・官公庁・厚生施設は、施設特有の意味を表現するデザインとなるよう心がける。
- ・学校景観は、新築する場合でもできるだけその持っているイメージを保全していく。
- ・高層で数少ない歴史的景観としての駅舎、社寺の保全的修繕をはかる。
- ・河川は、年間を通じて水量を確保し、生きた河川を取り戻す。人工河川化はしない。
- ・人造湖は、釣った魚を食べる位に水質の向上を図る。
- ・田園は、主な視点場から、高圧線の鉄塔を隠すような修繕を心がける。
- ・パーソナル景観は、多義性のある景観としての特徴をいっそうひきだす事により、都市に個性と興行きを生み出すためのしかけとして注目していく。

参考文献 1) 安藤 昭・赤谷隆一 都市ア・メ・ニ・テ、計画論：都市公第39回学術講演会講演要旨集第4部、1984。